当院における漢方診療の実際

漢方薬は完全な配合剤であり“究極の薬剤”でもある

医療法人社団 健育会 湘南慶育病院 副院長/脳神経センター長 **寺山 靖夫 先生**

1979年　岩手医科大学医学部 卒業、慶應義塾大学医学部 内科学教室 入局
1990年　米国Baylor医科大学 神経内科 Research Associate
1999年　横浜市立脳血管医療センター 神経内科 医長
2003年　岩手医科大学医学部 神経内科学講座
　　(現：内科学講座 神経内科・老年科分野) 教授
2016年　慶應義塾大学医学部 神経内科 客員教授
2019年　医療法人社団 健育会 湘南慶育病院 副院長/脳神経センター長

都心からほど近く、多数の観光スポットがあることもでも知られている湘南地区にある神奈川県藤沢市では、活力ある環境共生型の都市形成を目指す「健康と文化の森地区」のまちづくり構想が進んでいる。医療法人社団 健育会 湘南慶育病院は同地区に立地し、「健康」の担い手として2017年に開設された。

同院の寺山靖夫先生は、岩手医科大学医学部 内科学講座 神経内科・老年科分野の教授を2019年3月に退官され、現在は同院の副院長/脳神経センター長としてご活躍である。

今回は、同院を紹介するとともに、これからの脳神経内科医療における漢方への期待など、寺山先生のお考えをお聞かせいただいた。

まちづくりの中核となる医療機関として開設された当院

神奈川県藤沢市は、1999年からまちづくりの一環として「健康と文化の森地区」構想に取り組んでいます。近隣にある慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)が「文化」を担い、「健康」の担い手として当院が2017年11月に開設されました。当院は、民間の医療法人健育会グループの一員ですが、SFCとの連携を重視し、慶應の「慶」と健育会の「育」、地域を表す「湘南」を組み合わせて湘南慶育病院と命名されました。

当院は「健康と文化の森」構想の中核施設となる病院であり、SFCとの連携による健康増進・抗加齢医学などの最先端の研究を推進していることに加え、ICTを活用した高齢者見守りサービスやロボットリハビリテーションなど、これからの医療を見据えた最新かつユニークな研究にも取り組んでいます。2020年からは慶應義塾大学看護医療学部の研修指定病院にもなる予定です。

また、当院は一般病床(30床)だけでなく、回復期リハビリテーション病棟(100床)、地域包括病棟(50床)と療養病棟(50床)を有しており、患者さんが急性期・回復期・慢性期のどの時期にあっても対応できることも大きな特徴です。

脳神経センターが脳神経疾患を包括的にケア

当院が立地する湘南東部医療圏は、人口の増加と高齢者の増加にともない脳神経疾患の有病率が上昇しています。そこで当院では、脳出血や脳梗塞などの「脳卒中」、片頭痛や緊張型頭痛などの「頭痛」、さらには「認知症」やパーキンソン病などの「神経変性疾患」など多彩な脳神経疾患の患者さんを包括的に対応するために「脳神経センター」を開設しました。当センターでは、われわれ脳神経内科医はもちろんのこと、精神科や心療内科などの他診療科の医師、リハビリテーションスタッフ、看護師、医療ソーシャルワーカーなどの職種がチームとなって、共通のコンセプトの下で患者さんのQOLの向上に取り組んでいます。

また、検診にも注力しており、脳ドックや人間ドックのデータを用いた研究も進めています。従来は、これらの検診の最終的なゴールが曖昧なところがありましたが、脳神経疾患の発症には生活習慣が大きく影響していることが明らかにされてきたことから、検診データを活用しながら脳神経疾患の予防と治療をトータルに診療できることを目指しています。

現在、脳神経内科外来では専門医が毎日診療しています。さらに、当院の総合診療科を受診される患者さんで脳

神経疾患の患者さんもしっかりと診療するための院内体制を整えています。

地域医療については、地域の限られた医療資源を活用しながら地域の医療機関との良好な関係による連携が求められていますが、当院は回復期リハビリテーション病棟を有していることから、かかりつけ医療機関や急性期医療を担っておられる医療機関からご紹介をいただいく患者さんも多く診療しています。

脳神経疾患治療において有用な漢方薬

当院では、漢方治療も積極的に取り入れています。その一つが、頭痛の治療に用いる葛根湯です。葛根湯は風邪薬の印象が強くありますが、頭痛の治療にも有用です。

私が医学部を卒業した当時の医療において、漢方はまだ程遠い存在だったのですが、そのような中で私自身が漢方を日常診療の中に組み入れるようになった疾患が頭痛でした。当時、頭痛に対して強い関心がありましたので、肩こり頭痛や片頭痛の治療に対する漢方治療を勉強したことが、漢方との付き合いの始まりでした。頭痛の治療に用いられる漢方薬はいくつもありますが、中でも有用性を実感したのが葛根湯でした。

その他の脳神経疾患に対する漢方薬には、認知症に対する抑肝散、慢性硬膜下血腫に対する五苓散など数多くありますが、私が特に注目している一つが、フレイル・サルコペニアにも有用で、脳卒中患者さんの転倒・転落を予防できる可能性がある人参養栄湯です（詳細は、p.3～p.8をご参照ください）。

認知症治療にも漢方が不可欠な存在

高齢化の急速な進展に伴い認知症患者さんは著しく増加しており、われわれ脳神経内科医にとっては避けて通ることができない重要な疾患です。認知症治療にも漢方が応用されていますが、その中でも欠かすことのできない処方の一つに抑肝散があります。抑肝散は、認知症の周辺症状など様々な症状に効果があります。

また、パーキンソン病患者さんの譫妄などの精神症状に対しても抑肝散は有用です。譫妄の治療に用いられる西洋薬はパーキンソン症状を引きおこしたり増悪させるおそれがありますが、抑肝散はパーキンソン病を悪化させることなく譫妄を治療できる薬剤であることを確認しています。

漢方を治療に組み入れることで医療連携も円滑に

認知症の治療で印象に残る症例をご紹介します。ある医師会の役員をされている先生からご紹介いただいた患者さんで、イライラや不安、譫妄などの症状も現れており、多種類の薬剤が処方されていました。さらに、患者さんのご家族にも看護・介護に伴う不安やイライラがみられ、精神的に追い詰められている状況にありました。そこで抑肝散を処方し、ご家族と相談をしながら、従来から服用されていた薬剤を少しずつ減らしていきました。そうすると患者さんの状態が徐々に落ち着いてこられたのですが、それに伴ってご家族も精神的に落ち着いてこられたのです。ご紹介いただいた先生が驚かれたことは言うまでもありませんが、私自身も“漢方の力”を実感しました。

その先生の働きかけによって医師会でも積極的に認知症の診療に取り組まれるようになり、さらには円滑な医療連携にもつながりました。

漢方薬は“究極の薬剤”である

高齢者医療においてポリファーマシーが問題となっています。現在は、高血圧症の患者さんであれば降圧薬を、糖尿病患者さんであれば血糖降下薬を、というような治療が行われています。しかし、それは“臨時の治療”であり、いうなれば空いている“穴”を一つずつ塞いでいこうという考え方に基づく治療です。しかも穴が多ければ、当然ながら使用する薬剤も増えてしまいます。これからは少ない薬剤数でいくつもの穴を塞ぐことができる薬剤が求められます。

近年、生活習慣病の治療薬に配合剤が増えていますが、まさに西洋医学が漢方に近づきつつある状況を表しているようにも思います。しかも、漢方薬は完全な配合剤であり、長年の経験に基づいて多くの要因に対応することができる“究極の薬剤”ではないか、とも考えられます。

漢方がさらに大きく発展するために、私も脳神経内科領域の立場からお手伝いをし続けたいと考えています。

取材：株式会社メディカルパブリッシャー 編集部　写真：小林 淳